



来年の今頃はもう出産だ

本多みゆきさんは、平成 23 年 12 月 9 日に、妊娠 35 週でお腹の女の子の赤ちゃんが子宮内で死亡してしまい、死産に至りました。臍の緒が命綱である胎児は、実際に生まれて自分で呼吸をしている新生児よりリスクの高い状態にあり、本多さんのようなケースは約 600 回に1回あるとされています。

感染症や自己抗体など、次回にも影響しうる死産の原因を検索するも異常ありませんでした。担当医からは、3か月後にまた妊娠して「来年の今頃はもう出産だ」と励まされました。

平成 24 年 5 月、本多さんは再度妊娠されました。エコーをみてびっくり、前回の借りを返すように双子の妊娠でした。12 月 11 日、前の子の「命日」のわずか 2 日後に、2 人の男の子を無事出産されました。まさに「来年の今頃はもう出産だ」の言葉の通りになりました。

産後、具合の悪い時期もありましたが坂井加代子助産師が赤ちゃんを連れてきておっぱいを吸わせるとたちまち軽快。この「赤ちゃん療法」で乗り切りました。



前の子には「逸風(いつか)」ちゃんと命名する予定でした。1人は「お姉ちゃん」の風の字をもらって「楓(かえで)」くん、もう1人は読みをもらって「樹季(いつき)」くんと命名されました。今でも本多さんがその写真を肌身離さないお姉ちゃんに見守られ、2人の男の子は健やかに育っています。

医者殿は結句うどんでひっかぶり

12 月に入りめっきり寒くなり、風邪の流行る季節となりました。のどが痛い、鼻水が出る、咳が出るといった薬をもらいに来られる妊婦さんもおられます。しかし、その前に次の原則を思い出して下さい。

- (1) 風邪薬は対症療法であって、風邪を治すのは自身の免疫力
- (2) 通常の風邪が、お腹の赤ちゃんに悪影響を及ぼすことはない
- (3) 妊娠中の薬は、できれば飲まないに越したことはない

通常の風邪の原因であるウイルスを殺す薬はなく、風邪薬は、抗炎症作用や鎮咳作用で症状を緩和するにすぎません。ただし 39℃ 近い発熱(インフルエンザの疑い)や多量の汚い痰をみる場合(気管支炎の疑い)は、専用の治療が必要になります。

上記の江戸古川柳は、医者には自分の風邪には結局のところ熱いうどんを食べて布団をかぶって寝ている。人には難しい顔をして薬を煎じて飲ませておきながら何だよ、と皮肉ったものです。しかし体を温かくして早く寝て、免疫力を高めることで風邪を治すという真理をも突いている一句です。



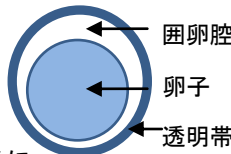
医師専用のインターネット・サイトに、「皆さんはご自分の風邪にどう対応していますか?」という質問があり、いろいろな答えが寄せられていました。「飯食って、風呂入って、明日までに絶対治すという気合」、「蜂蜜+にんにく+すりおろし生姜をお湯に入れて飲む」、「味噌汁チャージ(1 リットル)で水分、塩分補給」、「マスク(濡れマスク)をして寝て、のどを保湿する」、「C1000 タケダ一気飲み+赤ワインをレンジでチン」、「水分補給+下着頻回交換」、「寝る前にドライヤーで脊椎、骨盤辺りを数分温める」。このように保温、水分補給、休息など、抵抗力を高めることに主眼が置かれていました。薬を使う場合も、葛根湯、麻黄湯などの漢方薬が中心でした。妊婦さんも、通常の風邪にはなるべく薬を用いずに、この川柳のように対応してください。

生殖医学会で学術奨励賞

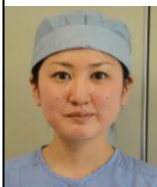
当院の吉田奈央・胚培養士は、平成 24 年度の日本生殖医学会の学術奨励賞を受賞し、11 月に長崎市で開催された、第 57 回総会で表彰されました。右の写真は学術総会での受賞の掲示です。

これは吉田胚培養士が、新潟大学農学部の大学院で行った研究です。受精は、1 個の卵子に1個の精子が侵入して起こりますが、多精子受精といって2個以上の精子が侵入する場合があります、正常な胎仔になりません。

卵子の周りには透明帯という殻があり、これと卵子の間のスペースを 囲卵腔 といいます。吉田らは、この 囲卵腔 が広いほど多精子受精が起こりにくくなることを発見しました。さらに、



ヒアルロン酸など種々の薬剤を用いて 囲卵腔 を広くすることで、多精子受精を減少させる可能性をも指摘しました。吉田胚培養士は、こうした基礎的研究を踏まえて、患者さんの胚の質向上に努力しています。



平成 24 年度 学術奨励賞受賞者氏名

吉田 奈央 (新潟大学大学院自然科学研究科)

Reproductive Medicine and Biology Vol.10 No.1
[Size of the perivitelline space and incidence of polyspermy in rabbit and hamster oocytes]

《晴帯抄》▼新潟市にも初雪が降り、今年も雪のシーズンとなりました。江戸時代の3俳聖の芭蕉、蕪村、一茶も初雪を題材とした句をいくつか残しています。

▼「初雪や水仙の葉のたはむまで」(芭蕉)。写真のように水仙に積もった少しの雪で葉がたわんでいるという、極めて写実的な句です。▼「初雪の底を叩けば竹の月」(蕪村)。初雪は少ししか降らないので、空の底を叩けばおしまい、もう月が出て竹林を照らしていると詠んでいます。▼「初雪や一三五六七」(一茶)。いかにも一茶らしいユーモラスな句です。初雪を喜んだ子どもたちが、五、六人外へ出てきたのでしょうか。▼芭蕉にはこの時期にふさわしい、また本紙にも関係のある名句があります。「ふるさつや臍の緒に泣く年の暮れ」暮に故郷の生家を訪ねてみると、自分のへその緒が大切にしまっており、今は亡き両親の愛に懐旧の涙にくれるのでした。

